

モスクワ日本人学校における 現地理理解教育と国際理解教育の取り組みについて

前モスクワ日本人学校 教諭

神奈川県川崎市立菅生中学校 教諭 島田 七奈

キーワード：現地校との交流、同居校との交流、芸術鑑賞教室

1. はじめに

ユーラシア大陸北部の国で世界一の国土面積を誇るロシア。日本の約45倍の国土を持つ大国である。2015年1月時点で、ロシアの人口は1億4300万人で世界第9位。首都モスクワには1220万人が暮らしている。国土全体が北アジア全体および東ヨーロッパの大部分に広がるため、11の標準時を持つ。それだけ広いということが言えよう。ロシアの気候は北からツンドラ気候、寒帯気候、冷帯気候、温帯ステップ気候で、一般に寒冷で東に進むほど年較差の大きい大陸性の特色が強くなる。

政治的には2014年のウクライナ騒乱のあとに生じたクリミア危機の影響がある。アメリカ合衆国、欧州連合、そして日本政府などの諸外国はクリミアの独立とロシアへの編入は無効であるとし、ロシアとの間で対立が続いている。そんな中でも2014年に黒海沿岸のソチで冬季オリンピック（ソチオリンピック）が開催された。また2018年にはワールドカップ（2018 FIFAワールドカップ）が開催されることになっている。

2. モスクワ日本人学校

モスクワ日本人学校は、ヨーロッパで最初にできた日本人学校である。1967年10月2日にあるアパートの2部屋から始まり、当時の全校児童数は16名だったそうだ。現在の場所に移ってきたのが1977年。2017年10月には50周年記念式典が開かれる予定である。現在は児童生徒数が約120名で、多くがスクールバスと自家用車で通っている。モスクワ日本人学校の特色のひとつに、同じ建物の中に他の国の学校が入っていることがあげられる。1階はスウェーデン、2階はイタリア、3階はフィンランドの学校があり、日本人学校が4、5階を使用している。5階にある体育館と外の運動場は共同で使っている。

3. 子どもたちの実態

昨今の治安上の問題から、子どもたちの登下校はバスか、自家用車、タクシー、あるいは保護者の付き添いが必要である。放課後も限られた空間で遊べることは出来るが、自由に出歩くことはない。ロシアで生活していても、日本人学校に通う子どもたちは、ロシア人と気楽に話したり、ロシアの生活文化に触れたりする機会はとても少ない。ロシアにいながら日本人に囲まれて生活をしている子どもが多いのが実情である。

しかしそんな中でも、モスクワ日本人学校では、少しでもロシアの文化に触れ、ロシア人との子どもたちとも関わりをもってもらおうと、現地校との交流を年に2回実施している。その他にも年1回の芸術鑑賞教室も行い、子どもたちが芸術性豊かなロシアならではの文化に直接触れる機会を設けている。また同じ建物の中にロシア以外の国も同居しているため、同居校との仲を深めるため、また異文化理解を推し進めるために、スポーツ交流や文化交流も不定期に実施している。

そんなモスクワ日本人学校での現地理理解教育と国際理解について紹介する。

4. 現地理理解教育～現地校との交流を通して～

(1) 小学部

「交流を通じて、お互いの国の文化・風俗・習慣などを理解し合い、交友を深める」という目的のもと、ロシ

アの現地校（1239番校）と1年に2回交流を行っている。2学年ずつ（低・中・高学年）に分けて日にちをずらし、2回のうち1回は現地校を訪問し、もう1回は現地校を招いて、授業を受ける。平成27年度の交流内容は以下の通りである。

1 回目（モスクワ日本人学校が現地校を訪問）

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
1 限目	手作り	数学	音楽	ビタミンの話	総合	日露伝統服
2 限目	体育	英語	自然科学	英語	図画	ロシアティ伝統

2 回目（現地校がモスクワ日本人学校を訪問）

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
1 限目	ものづくり	手裏剣づくり	豆まき	習字	家庭科	家庭科
2 限目	体育	手裏剣づくり	そろばん	チェス	家庭科	家庭科

現地校を招くとき（年明けの1月が多い）は、日本の伝統的な行事や遊びを取り入れて、ロシア人の子どもたちに日本の文化を実際に体験してもらい授業を意図的に組んでいた。子どもたちは英語とロシア語、身ぶり手ぶりでコミュニケーションを図っていた。

(2) 中学部

今まで交流を行ってきた現地校の日本語学科がなくなり、平成26年度より1223校との交流を行っている。教育の質が高く、意欲的に取り組む子どもたちが多いという印象を受けた。平成27年度に実際に行った活動を紹介する。1回目は現地校を招いた。まずは全員が一堂にホールに会し、モスクワ日本人学校の中学部の生徒たちによる日本文化の紹介を行った。ロシア語の先生たちの力も借りてロシア語で日本文化や日本の風習などを紹介。パワーポイントで写真が提示されたため、ロシア人の子どもたちも興味津々の様子で聞き入っていた。そのあとは、「折り紙」「書写」「伝統遊び（コマ・メンコ・紙風船・けん玉・竹とんぼ・お手玉）」の3つのブースに分かれ、日本文化を体験した。日本語を学んでいるロシア人の子どもたちだったので、実際に日本文化に触れることができ、とても喜んでいて。来て頂いたお礼としてお土産にダルマをあげた。

2回目は現地校を訪れた。手作りのお菓子でおもてなしを受け、簡単な衣装を身につけてのロシア伝統舞踏体験、日本語による「大きなかぶ」の劇披露、リズムに合わせて詩（歌）と一緒に歌う活動など盛りだくさんの内容であった。2回の交流とも2時間の時間を取ったが、もっと時間があればと感じるほどアツという間であった。

〈交流後の中学部の子どもの感想〉

- ロシア語や日本語ができなくてもなんとなくはコミュニケーションをとることができた。伝統遊びを楽しくやってもらってとても良かった。
- 担当したのは「習字」で工夫した点は日本風のBGMを流して日本っぽくしたところ。黒板にあらかじめわかりやすく説明を加えた所。本番ではロシア語が通じなくてもジェスチャーや簡単な英語で伝えることができたので本当に良い経験になりました。
- 僕たちのおもてなしよりもはるかに良いものを向こうの学校は準備してくれたからびっくりした。ロシアの民族衣装を着せてくれたり、ロシアの楽器をやらせてくれたことから、ロシアの文化を伝えたいという必死さが伝わってきた。
- ロシア人の友達をもっと作りたかったと思いま



日本文化の紹介 ～折り紙コーナー～

した。またロシア人が真剣に日本語を学んでいるところを見て、私もそういう風にロシア語を学びたいと感じました。どんなに下手でもしゃべらないよりはいいということも実感しました。

モスクワ日本人学校では週1時間、ロシア語の授業があるが、その中で学ぶことは限られている。子どもたちが実際に同年齢のロシア人と接し、ロシア語あるいは英語で、また時にはジェスチャーを交えながら必死に意思疎通を図る姿こそが、相手を思いやり尊重し、自分自身や自国のことに誇りをもって生きていくことにつながるのではないかと思う。

5. 国際理解教育

(1) 同居校との交流を通して

① スポーツ大会

日本人学校のある建物の中にイタリア、スウェーデン、フィンランドの3つの国の学校があるため、それらの同居校との交流が行われている。教員間では授業参観を、児童生徒レベルではスポーツを通して同居校との交流が行われている。

平成25年から3年間、小学部は毎年10月に4校合同で「アスチックデイ」を実施した。平成27年度は60M走、走り幅跳び、ボール投げ、60Mハードル、学校対抗リレーを行った。

中学部は今年、イタリアン校主催でサッカー大会を行った。ユニフォームをそろえて参加した学校（国）もあたり、各国の国旗を振って応援したり、それぞれの国の特色が出ていた。サッカーのルールは世界共通だが、試合の進め方や応援の仕方などは国それぞれ。子どもたちはまさに実体験を通していろいろな国の考え方や習慣を感じたようである。とても充実した時間であった。モスクワ日本人学校ならではのこの取り組みは、今後も是非続けて欲しいと思う。

② 聖ルシア祭

キリスト教の聖人、聖ルシアの聖名祝日を祝う行事で、12月13日に行われ、スカンジナビア諸国と南欧が主の伝統行事である。同居校のスウェーデン校の招きで12月13日前後に、毎年小学部6年生が招待され、歌や演奏を聴く。白い服を着て天使の扮装をした子どもたちとの交流を通して、日本とは全く異なるクリスマスを体験することができた。

(2) 芸術鑑賞教室

毎年12月に行われる。平成25年度と27年度はロシア舞踊団、ラーダンカの人達がモスクワ日本人学校を訪れた。民族衣装をまとうて歌や踊り、合奏を10曲以上披露してくれ、子どもたちも実際に踊ったり歌ったりしてロシアの文化に触れる経験をした。

〈中学部の子どもの感想〉

- 見たことのないロシアの楽器や初めて聴く曲がたくさんあり、ロシアの文化に触れることができて良かったです。また中には知っている曲もあってとても楽しい時間となりました。
- 初めてロシアの民族舞踊を聴きました。衣装がロシアっぽくてすごく綺麗で、声も高く太くて印象的でした。女子が踊るおどりはすごく目が回りました。近くで聞いたラーダンカの皆さんの声はすごく迫力がありました。

年に一度の芸術鑑賞教室ではあるが、ロシアの文化に生で触れることが出来るとても貴重な時間である。芸術生豊かなモスクワに暮らしていると、多くの子どもは家族と一緒にバレエを見たり、民族舞踊を見たりと芸術に触れる機会がある。しか



伝統的な衣装を身につけて歌を披露するロシア舞踊団

し、モスクワ日本人学校で行われる芸術鑑賞教室では、歌や衣装、楽器の説明などを通訳さんが日本語にしてくれるので、わかりやすい。また実際に楽器を演奏させてくれるなど実体験が出来るのも大きな特徴である。小学校の低学年から芸術に触れ、日本とは違う文化を経験することは大きな意味があるに違いない。

6. おわりに

モスクワに赴任すると知ったときは、正直不安だった。しかしそんな不安も実際にモスクワ日本人学校に赴任し、子どもたちはもちろん職員や保護者など素晴らしい出会いに恵まれて、少しずつ消えていった。気候も含め生活面での不安も取り越し苦労だった。今ではモスクワに来ることが出来て本当に良かったと思っている。

この3年間、ここで紹介した現地校との交流などをきっかけに、ロシア、モスクワの教育や文化に興味をもち直接触れることが出来たことは私にとって大きな収穫であった。そしてこのモスクワ日本人学校ならではの同居校との交流も、初めての経験が多く得るものが多かった。そこで聞いた話、実際に体験したことは私のものの見方を大きく変えるものだった。

また外から日本を見ることによって、日本や日本文化のことを改めて考え直すことのできた3年間であった。ロシア、モスクワのことを多く知り、同時に日本の素晴らしさを多く再発見したこの在外での経験は、これからの私の教員生活においても大きな影響を与えることは間違いない。ここで経験したことや、感じたことを伝えていき、目の前の子どもたちが少しでも何かを感じてくれたらと思う。

児童生徒にとっても、ここモスクワでの現地理解教育や国際理解教育で学んだことが大きな財産の1つになるとえよう。今後もこの活動が継続され、ますます充実していくことを願ってやまない。